第２学年音楽科学習指導案

指導者　小林　美佳

１．指導内容　Ａ表現（２）イ　，〔共通事項〕（１）ア（音色）

２．題材名　　さまざまな楽器の音色の違いを感じ取り，特徴を理解して演奏しよう

３．題材設定の理由

本題材では，さまざまな楽器のもつ音色に着目した授業を展開する。本校の 2 年生は昨年度，西洋の声と日本の声（我が国の伝統的な歌唱）を比較聴取し，それぞれの違いを感じ取るとともに，長唄を教材として「我が国の伝統音楽」との出会いを経験した。その中で生徒たちは，これまで自分たちが「当たり前」だと思ってきた既有の知識や技能等が，音楽をある一面からのみ見たものであったことに気づいた。「我が国の伝統音楽」との出会いが，音楽の多様性を知り，新たな知識や技能等を得るきっかけとなったのではないだろうか。昨年度の授業は，「我が国の伝統音楽」を学ぶ第一歩として構成した。中学校３年間を見通した音楽活動の中で，「我が国の伝統音楽」を教材とした学習を系統的に構築していきたいと考えているため，2 年生では器楽を題材とした授業を展開していくこととした。

歌唱で取り扱った「声」の学習でもそうであったが，生徒はこれまでの音楽の学習で得てきた既有の知識や技能等を，“音楽活動をするうえで当たり前のこと”と認識している。きれいな声といったら「裏声」で歌うことだと考えていたし，「地声」で歌うことはよくないことだという意識をもっていた。その生徒の当たり前を崩し，新たな知識・技能等を学ぶことで，より音楽への興味・関心は増し，主体的・意欲的に学習に取り組むことができると感じた。そこで今回は，さまざまな楽器の音色を聴くことを機に，生徒が新たな器楽の面白さを感じられるように授業を構成したいと考えている。

今年度も昨年度と同様に長唄を教材とし，いずれは生徒が自分たちで唄と三味線を合わせて演奏を楽しめるように，授業を展開していきたい。しかし，ただ三味線の弾き方を教え込んだとしても，生徒が興味をもって主体的・意欲的に学ぶとは限らないため，まずは楽器を演奏するときの「きれいな音」について考えさせることとした。これまで生徒が学んだ主な楽器は小学校でソプラノリコーダーと鍵盤ハーモニカ，中学校では箏である。器楽の授業では，楽器の構造や素材等の説明や，演奏技術の習得に内容が偏りがちで，じっくりとそれぞれの楽器の音色を聴く時間をあまりとっていなかった。これまでの生徒の実態を考えると，「きれいな音とはどんな音か」と問われると，雑音の少ない澄んだ響きを思い浮かべるのではないかと予想される。そのような音色で演奏するために，楽器の構え方や息の入れ方，指の動かし方などを学んできたのではないだろうか。しかし三味線の音色は，サワリによって生まれる独特の響きが特徴である。それぞれの楽器の音色を聴取し，楽器の特徴によって音色に違いがあることや，楽器がつかわれる曲種によっても求められる音色はさまざまであることを感じ取らせていきたい。

今回使用する細棹三味線は長唄の伴奏楽器である。ピアノやリコーダー，箏は独奏でも伴奏でも演奏されるが，細棹三味線はそうではない。唄と合わせて演奏するための楽器であることを知識として得ることで，他の楽器との違いを理解し，三味線音楽ならではの面白さに気付いてほしい。そうすることで，生徒の「自分たちで演奏してみたい」という意欲を高められるのではないだろうか。そして，昨年度よりもさらに音楽の多様性を理解し，「我が国の伝統音楽」に対する興味・関心を高め，理解を深めていけ

るのではないかと考えている。

2時間目，3時間目では，実際に三味線を演奏し，長唄『鳥羽繪』の一節を唄と合わせて演奏することに挑戦する。三味線らしい音の響きにこだわり，身体の使い方やバチの当て方，奏法などを創意工夫し，試行錯誤して演奏できるように授業を構成していきたい。そして来年度は，自分たちで長唄『鳥羽繪』を演奏し，グループで発表しあうなどして，「我が国の伝統音楽」のよさや面白さを他者にも伝えることのできる力を身につけさせたいと考えている。

４．全体研究との関わりについて

全体研究では昨年度から，『新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～』という主題のもと，研究を進めてきた。今年度は副題を～「資質・能力」を見取る評価の在り方～として、さらに研究を深めている。

これを受けて音楽科では，今年度の研究の重点を次のように設定した。

○前年度の実践内容を踏襲し，聴取活動を行うことで生徒の気付きを促し，それを基にして実技指導へとつなげる授業実践を行う。
○器楽の指導に当たっては，音色や奏法の違い等を聴取させることで，聴く力を高めるようにするとともに，「我が国の伝統音楽」についての興味・関心を高め，理解を深められるようにする。
○我が国の伝統音楽を教材とした授業の評価の在り方について検討する。そのために，グループ学習等における生徒の表現活動の様子について，言葉だけではなく，音声や映像など含めた記録を残す。それらの記録を活用して，生徒の思考の変容や，思考力，判断力，表現力等の高まりについて捉えていく。

※本校音楽科で高めたい「聴く力」とは

音楽を聴いて強弱や速度などの要素を知覚したり，それらの働きによって生み出される特質や雰囲気を感受したりする力だけでなく，自ら価値判断し，音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる力などを総合して定義している。

（1）音楽科で身につけさせたい資質・能力について

新学習指導要領では，全ての教科・領域等において「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で資質・能力の育成を目指すことが示された。本校の音楽科では，三つの柱の中でも特に「思考力，判断力，表現力等」を高めることを研究の目的としている。「思考力，判断力，表現力等」は，それ単独で高められるものではなく，他の二つの柱と密接に関わりあっている。生徒が既有の知識や技能を活用して音楽活動を行う中で，さらに新たな知識や技能を得ることや，意欲的に音楽活動に取り組むことで豊かな情操を養ったり，感性を高めたりすることが「思考力，判断力，表現力等」を高めることにもつながっていると考えている。

また，これらの資質・能力は，昨年度の全体研究で重視していた「音楽的な見方・考え方」とも関連している。新学習指導要領解説では，音楽的な見方・考え方を「音楽科の特質に応じた，物事を捉える視点や考え方であり，音楽科を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの」として次のように示している。

【中学校音楽科】
音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること。

このことから本校音楽科では,「音楽的な見方・考え方」を働かせ,「思考力，判断力，表現力等」を高める授業の構成を目指していく。その方策として,「我が国の伝統音楽」を教材とし，聴取活動による音楽的な感受の場面を効果的に取り入れることで，生徒に音楽の多様性を理解させるとともに，自分たちで音楽表現を創意工夫できる力を身につけさせたいと考えている。

（2）資質・能力を見取るための工夫

資質・能力を見取ることは簡単ではない。本題材では，A表現の器楽の分野で授業を構成することから,「音楽への関心・意欲・態度」「音楽表現の創意工夫」「音楽表現の技能」の三観点での評価となる。音楽科では主に「思考力，判断力，表現力等」を高めることを目的に研究しており,「音楽表現の創意工夫」がこの資質・能力と最も関連する評価の観点であると考える。本題材では主に 2 時間目の授業において，この観点での見取りを行う。

前述したように，資質・能力の三つの柱は密接に関わり合っているため，1 時間目で得た知識や感受したことが，2 時間目に生かされることで「こんな音色を出して演奏してみたい。」「どうやったらその楽器らしい音色で演奏できるだろうか。」などといった生徒の思いや意図につながっていくのではないかと考えている。

具体的な見取り方に関しては，これまで行ってきた方策を整理し，まとめていきたいと考えている。特に重点を置きたいことは，生徒の思考の流れ，変容をいかに把握するか，ということである。これまでも授業で使用するワークシートの内容について工夫を行ってきた。今回は教師だけでなく生徒が自分自身の学習を振り返り，次の学びに生かせるようなワークシートの作成を目指していきたい。具体的には，一つの題材で学んだことや感じたことを，一枚の「振り返りシート」に記入させていきたい。これまでは，1 時間ごとに配布したワークシートの最後に，感想欄を設けていたが，次の授業では活用しないことも多かった。そこで,「振り返りシート」に毎時間の学びや感じたことをまとめ，教師がコメント等を入れて次の授業で返却することで，前時の振り返りや，本時にどんなことを努力すべきかなどを生徒自身が認識できるようにしていきたい。今回のような器楽の授業だけでなく，歌唱や鑑賞，創作の授業でも同じようにシートを記入することで，どの分野・領域でも同じ形で見取りを行うことができるのではないかと考えている。

また，映像や音声の記録も活用していきたい。発表等の場面だけでなく，生徒が個人やグループで試行錯誤する様子も，出来る限り録音・録画し，個々の変容を見取っていきたい。ボイスレコーダー，ビデオカメラ，タブレット等の機器を適切に利用し，時には生徒自身に記録させることも考えている。そして，授業後に音声や映像を分析する中で，生徒の思考の流れや変容を把握するための適切な場面や方法を，研究の成果として提示することを目指していきたい。

５．教材について

（１）教材

【聴取教材】　　・教師による器楽演奏

【歌唱・器楽教材】　・長唄『鳥羽繪』　杵屋六左右衛門　作曲

（２）教材選択の理由

本題材では，器楽の分野において「我が国の伝統音楽」を教材とした授業を構成する。三味線を学ばせるにあたり，生徒のもつ「楽器で演奏するときのきれいな音」の認識を整理し，三味線の独特の響きがこれまで学んできた楽器の音色とは異なることに気づかせたい。そのため，三味線で曲を演奏することよりもまず，音色について聴き取ることから始めることとした。これまでに生徒が学んできた楽器と三味線の音色を比較させ，それぞれの特徴によって音色にも個性がでることや，それぞれによさがあることを感じ取らせたい。そのため，聴取教材としては楽曲を扱わず，教師がさまざまな楽器で出した音色について，生徒に違いを聴き取らせることとした。

また，昨年度の歌唱の授業において，長唄『鳥羽繪』を扱ったことから，3 時間目にはその一部分を三味線で演奏し，唄と合わせて演奏することの面白さを感じさせたいと考えている。そして来年度，3 年生の学習で，他者と合わせて演奏する技能を高めたいと考えている。

６．題材の目標

・さまざまな楽器の特徴について興味・関心をもち，それぞれの音色の違いを知覚・感受したり，実際に楽器を演奏したりすることで，三味線の特徴（楽器の構造や奏法，その楽器固有の音色や響き，よさなど）について，自分なりの考えをもつことができる。

・三味線の構造や奏法を理解し，楽器の特徴を生かして曲種にふさわしい音で演奏することができる。

７．題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
① 三味線の特徴（楽器の構造や奏法，その楽器固有の音色や響き，よさなど）に関心をもち，他の楽器との音色の違いを聴き取り，「三味線らしい音」を追求する学習に主体的に取り組もうとしている。	① 楽器それぞれの固有の音色や響きなどの違いを知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，楽器の特徴を理解し，基礎的な奏法を生かした音楽表現を工夫し，どのよう演奏するかについて思いや意図をもっている。	① 三味線の特徴，基礎的な奏法を生かした音楽表現をするために必要な技能（奏法，姿勢や身体の使い方など）を身に付けて演奏している。

８．指導計画と評価計画　（全３時間）

ねらい	時	学習活動	評価規準	☆Ａと判断する生徒の状況例 ■個別な働きかけを要する生徒への支援	備考
楽器を演奏するときの「きれいな音」とはどんな音なのか，楽器の特徴を踏まえて考え，三味線の音色について聴き取る。	１時間目（本時）	・楽器を演奏するとき，どんなことに気をつけると「きれいな音」を出せるのか考える。 ・教師が演奏する楽器の音色を聴き，きれいな音と感じるかどうかについて考え，意見交換する。 ・三味線の音色を聴き比べ，どちらが三味線らしい音がするか聴き取る。 ・三味線の特徴を知り，独特の響きを実際に演奏して試す。 ・三味線の特徴を知ったうえで,「三味線らしい音」について改めて考える。	関①三味線の特徴（楽器の構造や奏法、その楽器固有の音色や響き，よさなど）に関心をもち，他の楽器との音色の違いを聴き取ったり，実際に楽器を演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。	☆さまざまな楽器と三味線の音色の違いを聴き取り，その特徴について自分の言葉で説明したり，仲間と意見交換したりできている。 ■音色の違いやそれぞれの楽器の特徴を聴き取ることができない生徒には，仲間の意見を聞かせたり，教師がもう一度音を出したりして確認させる。	・学習形態 一斉
「三味線らしい音」で演奏するには，どうしたらよいか考え，演奏する。	２時間目	・三味線の素材や構造などについて学ぶ。 ・基本的な奏法について学び，実際に演奏する。	創①楽器それぞれの固有の音色や響きなどの違いを知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，楽器の特徴を理解し，基礎的な奏法を生かし	☆三味線らしい音について自分なりのイメージをもち，楽器の特徴を生かして，さまざまな奏法を試しながら，どのように演奏すればよいか試行錯誤している。	・学習形態 一斉

		・「三味線らしい音」を出すためには，どのような弾きをすればよいかについて，試行錯誤する。ペアやグループでさまざまな弾き方を試し，意見交換する。	た音楽表現を工夫し，どのよう演奏するかについて思いや意図をもっている。	■活動が進まない生徒には，ペアやグループの仲間と一緒にさまざまな奏法を試させ，音色の違いを確認する。	・学習活動 ペア・グループ
三味線で長唄の一節を練習し，唄と合わせて演奏する。	3時間目	・「鳥羽繪」の一部分を三味線で練習する。 ・ペアやグループで，「鳥羽繪」の一部分を唄と合わせて演奏し，お互いにアドバイスしあう。	技①三味線の特徴，基礎的な奏法を生かした音楽表現をするために必要な技能（奏法、姿勢や身体の使い方など）を身に付けて演奏している。	☆三味線の基礎的な奏法を生かして，唄に合わせて演奏している。 ■演奏ができない生徒には，手付の音を減らして難易度を落とし，基礎的な奏法を確認しながら，教師と一緒に演奏させる。	・学習形態 個人・ペア・グループ

9．本時の授業について

（1）日時　平成 30 年 6 月 30 日（土）10：10

（2）場所　山梨大学教育学部附属中学校　第 1 音楽室

（3）本時の目標：さまざまな楽器の音色と比較し，三味線のもつ音色の特徴について聴き取り，理解することができる。

（4）展開

過程	学習のねらいと学習活動	教師の指導・支援	評価・備考
導入 （5 分）	**1．昨年度の長唄の授業を思い出し，日本と西洋の声の違いについて確認する。** ・長唄の発声の特徴や、ドイツリートの発声（頭声発声）の特徴について確認する。	・長唄で使われる「表声」と西洋の頭声発声の違いについて確認する。 ・「きれいな声」には，さまざまな考え方があったことを思い出させる。	・学習形態 一斉

	２．教師の演奏する楽器の音色を聴き，「きれいな音」と感じるかについて，意見交換する。 ・普通に吹いた音，わざと雑音を入れて吹いた音など，教師が演奏するリコーダーの音色を聴いて，感じたことを意見交換する。 ・ピアノを普通に鳴らした場合と，雑音を入れて鳴らした場合で，音色はどう変わるのか聴き取り、感じたことを意見交換する。 ・「きれいな音」と感じる音色の特徴について，それぞれの考えをまとめ，全体で共有する。	・小学校の学習を思い出させながら，意見交換させる。 ・吹奏楽部など，楽器の演奏経験が豊富な生徒に，普段どんなことに気をつけているのか問いかける。 ・雑音の少ない音のほうが「きれいな音」だと感じられるよう，変化をつけて音を鳴らす。 ・ピアノなど他の楽器でも，「きれいな音」の感覚は同じかどうか問いかける。	・学習形態 一斉
展開 （40 分）	**３．，教師の演奏する音色を聴き比べ，三味線らしい音色について考える。** ・教師が演奏する 2 種類の楽器の音色を聴き、どちらが三味線の音色かについて考える。 ・ギターと三味線では，どちらの音色が「きれいな音」だと思うか，意見交換する。 ・教師が演奏する三味線の音色を聴き，感じたことを意見交換する。 ・三味線らしい音色と言える条件は何なのかについても，考える。 **４．実際に三味線で音を出し，音色の違いを感じ取る。** ・教師が演奏した 2 種類の音色は，どうしたら出すことができるのか，実際に音を出して考える。 ・改めて，三味線らしい音色とはどんな音色なのか考え，全体で意見交換する。	・ギターと三味線の音を出し，どちらが三味線の音か聴き取らせ，音色の違いについて考えさせる。 ・普通に音を出した場合と，サワリ山を押さえて響きを止めた音を出した場合の違いを聴き取らせる。 ・この時点では，どちらが三味線らしい音色かは伝えない。 ・三味線の持ち方や奏法などはこの時点では教えず，どんな響きがするのか，どうしたら 2 種類の音色が出せるのかを考えさせる。 ・生徒の発言を聞き，実際に試させながら，サワリの響きを確認させる。	関①三味線の特徴（楽器の構造や奏法、その楽器固有の音色や響き、よさなど）に関心をもち、他の楽器との音色の違いを聴き取ったり，実際に楽器を演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。

	５．サワリなどの特徴を理解し，音を出しながら三味線独特の響きを感じ取る。 ・三味線音色の特徴を確認する。 ・昨年学んだ「長唄」の伴奏につかわれる楽器であることを確認し，三味線独特の響きがどのような印象を与えるのか考える。 ・楽器にはさまざまな特徴があり，その特徴によって「その楽器らしい音」に違いがあることを理解する。	・サワリの響きについて，音色を聴かせながら説明する。 ・「三味線らしい音」と「きれいな音」は結びつくか，同じなのかについて考えさせる。今回の授業では，三味線の音色が「きれい」「よい音色」だと感じられない生徒がいてもよい。 ・「長唄」の伴奏楽器であること，独奏楽器ではないことに触れ，唄と合わせるためにふさわしい音色であることを理解させる。 ・実際に音を出させることで，三味線の響きを感じさせるだけでなく，最初に聴いたときと比べて印象に変化があるかについても問いかける。 ・必要に応じてバチを配付する。	
まとめ （5 分）	**６．活動の振り返りと，次回の内容の確認。** ・今日学んだことと感じたことをワークシートに記入する。 ・今日の授業について感じたことなどを意見交換する。	・次回は三味線について詳しく学習し，どうしたらふさわしい音が出せるかについて考えることを伝える。	・学習形態 一斉